
レイニー・グレイの口づけを

金本ちはや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイニー・グレイの口づけを

【Nコード】

N5033P

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

凍てつくような霧雨に打たれ、男は静かに死を迎えようとしていた。雨のなかから現れた、黒い髪の女。美しい死神に、男は幸せそうに笑ってみせた。「よお」と。あるひとつの命と恋が終わるまで。【『死神と拳銃』本編】

(前書き)

友人に。

まるで絹糸のような、やわらかな雨が降っていた。

雨は音もなく地面に吸いこまれ、しつとりと湿り気を残していく。あたりは霧が立ちこめたようにぼんやりと灰色に煙っていた。

ぬるぬると肌を這う血が雨に溶けていくのを感じながら、葉山^{はやま}はゆつくりと息を洩らした。

あれほどひどかった痛みは遠く過ぎ去り、今はただ凍えるように寒かった。動かない手足の末端はすでに体温を失いつつある。どくどくと耳の奥で刻まれる鼓動に合わせて傷口から溢れる鮮血だけが、たぎるように熱かった。

なんともあつけない終わり方だと思う。

刑事などという物騒な職に就いている以上、常に覚悟はあった。託された拳銃は矜持と責任の証であると同時に、隣合わせの危険をおわせていた。

それでも、葉山にとって死は掴みどころのないものだった。理解しきれないもの、知り尽くせないもの。生きているのだから当然といえは当然だが、ふやけたような薄暗い影はあまり快いものではなかった。

だからといって、恐怖を感じたことはない。

いや、あることはある。だが少なくとも刑事になってからはない。残していく者への愛惜だとか、いずれ忘れられしまうさびしさや悲しみなら、何度か考えた。しかしどんなに死を思っても、怖いという気持ちは湧かなかった。

それはきつと、彼女のお陰だ。

ふつとそばに気配を感じて、葉山は瞳を動かした。ぼやけた視界に薄く影が差し、見知った顔が映りこむ。

「……よお」

唇の端を持ち上げてみせると、彼女は不快感に顔をしかめた。

「何をしてるんですか」

「なに、って……見てのとおり」

死にかけてんだよ、と暗に答えると、彼女はさっと顔を強張らせた。見つめてくる黒い瞳が一瞬、薄氷のようにひびわれる。

「……風邪引きますよ」

ぼつりと落とされた眩きあまりにも現状とちぐはぐで、葉山は掠れ声で笑った。

「あいかわらず、わかりやすいなあ、あんた、っ」

ひゅうと喉が鳴って引きつり、熱の塊がこみ上げてきた。とつさに顔を逸らして吐き出す。音を立てて飛び散った赤黒い色は、やけに生々しかった。

「悪い……」

「しゃべらないください」

ぴしゃりと言葉を遮られる。濡れた頬に触れてくる指先は産毛が逆立つほど冷たく、そして震えていた。

「どうして」

真冬の夜気を思わせる掌に包みこまれ、葉山は思わず微笑んだ。

この胸を満たす想いの名前は 間違いなく幸福、だ。

「どうして、笑うんですか」

「あんた、が、来てくれたから」

だから、嬉しい。

馬鹿じゃないですか、と彼女は毒づいた。

「というより、馬鹿です。本当に馬鹿です。真正の馬鹿です。どうしようもない大馬鹿です」

「……さすがに、ひどくねえか」

「わたしは真実を言ってるだけです」

彼女は唇を噛みしめた。華やかさはないが、ひっそりと咲く野の花のような美しさを持つ顔は、涙に張り詰めていてもきれいだっただ。他でもない自分が泣かせているのだと思うと、妙に心地よかった。

「なんで」

細い指先が汚れた口元を拭う。指の腹が唇に当たった瞬間、彼女の喉が小さく動いた。

「なんでこんなことになっちゃったんですか」

「……一応、最後まで、応戦は、した」

「当たり前です」

華奢な肩からこぼれた黒髪が視界を覆う。水気を含んだぬばたまの髪は、まぶしいほど艶やかだった。

闇のような漆黒の髪と瞳、蛸めいた白い肌。少女の面影を残す整った面は、出会った頃はなかなか表情を浮かべず、まるで人形のようだったと思い出す。

抱きしめるたびに折れてしまわないかと危ぶんだ体はぬくもりを持たず、いつも凍てついていた。こんな雨に打たれ続けた死人の体温に似ている。

名前を訊くと、困ったような、少し悲しげな顔をした。死神にそんなものはないのだと答える声は、自嘲めいて聞こえた。

死神なんて空想じみた存在を、最初の頃は受け入れられなかった。馬鹿にしているのかと怒鳴ったことは数えきれないが、彼女が人間の魂を狩る場面を見て以来、信じるしかなかった。

細腕が振りかざす大きな鎌の影。刃の閃き。一瞬の、だからこそ耳にこびりつく魂の断末魔。

彼女が葉山の前で鎌を振るったのは、あとにも先にもナイフで刺し殺されかけた彼を守ったそのときだけだ。

義務ではなく、背徳にすら近い想いのために彼女が魂を刈り取ったと知って、葉山はいよいよ抜け出せなくなった。

どこからともなくふらりと現れ、当然のようにそばにいた。葉山が暗い思念に囚われているときほど寄り添ってきた、得体の知れない女に惹かれつつあった心は、一気に加速した。

彼女は、限りなく死に近い場所に立つ葉山の監視者であり、いずれ訪れる終わりのときに引導を渡す案内人でもあった。死と生、隣合っただけでも決して触れることは許されない。わかっただけでも、ふ

たりはあつさりと境界線を踏み越えてしまった。

後悔はない。できそうにない。あるとしたら、彼女と同じものに生まれてこれなかったことだ。

葉山が死神だったら。あるいは彼女が人間だったら。そうすれば、もつと簡単に結ばれて、もつと長くそばにいられたのに。

そんな意味のない感傷も、あともう少しでおさらばだ。

葉山は再び息をつくと、ずっと気にかかっていたことを尋ねた。

「……なあ」

「なんですか」

「俺、死んだら、どうなんだ？」

わずかな沈黙ののち、怒っているような声が返ってきた。

「知りませんよ」

「は」

「わたしの役目は、あくまで死者の魂を彼岸へ導くことです。彼岸にたどり着いた魂の行方なんて知りません。そういうことは上の方々が決めるんです。生前の業によって生まれ変わったり、奈落に墮とされたり、逆に天に召し上げられたり」

「……神様の使いに、なるって、ことか？」

「平たくいえば。でもそんなのは、貧しい人を救うために一生を捧げたような善人だったりしなくちゃ、なかなかありません。あなたみたいな人は、奈落へまっ逆さまに決まっています」

睨んでくる黒い双眸に葉山は苦笑した。

「だろっ、な。ま、でも、これで安心、したわ」

「……何を」

「いつか、あんた、と、おんなじモンに、なれるかもしれねえ、んだなって」

眉をひそめていた彼女は目を瞠った。

「すぐには、無理、でも。いつか……いつか、また、あんたと一緒に。」

言葉は続かず、激しく咳きこんだ葉山の呼吸音に消えた。

「ッ」

彼女が微かな悲鳴を上げる。びしゃりと血反吐をぶち撒けながら、葉山は命の刻限を感じ取った。

カウントダウンのはじまりだ。

「……………あ、のさ」

彼女の冷たささえ曖昧になっていくなか、葉山は唇をわななかせた。

じわじわと黒ずんでいく視界で彼女だけが鮮やかだった。今にも泣き崩れそうで、それでも決して目を逸らさない。

だから、どうしようもなく好きなのだ。

「絶対、あんたのせい、じゃ、ねえから」

この死は早すぎるものではない。絶対に、だれがなんと言おうと、彼女に責はない。

ただ葉山の寿命が尽きた。それだけだ。

彼女はくしゃりと顔を歪めた。子どものような情けない泣き顔ですら、やっぱりきれいだった。

「……………本当に、あなたは馬鹿です」

白い頬を静かに涙が伝う。目の前を覆う影が濃くなり、葉山は反射的に瞼を下ろした。

そつと唇に触れる、狂おしいほど愛しい冷たさとやわらかさ。

神様。

彼女の分まで、罪は俺が引き受けます。だから神様、どうか彼女が幸せでいますように。

そして、いつかまた。遠い遠い先でもいいです。いくらでも待ちますから。

神様。

彼女の唇の感触を確かめながら、葉山は祈った。祈り続けた。

最後の口づけは、彼女の涙の味がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5033p/>

レイニー・グレイの口づけを

2010年12月16日12時25分発行